

# 床上排泄患者の心理分析

## 5階東病棟

○小原 美和・藤岡 珠美・安田 昌美  
中村 美恵・掛水 淳子・名越 明子  
大石 玉美・橋本佳世子・平石 愛子

### I. はじめに

排泄とは人間の生命維持、成長、発育のための代謝過程において、身体にとって不要なものを排出することである。健康であれば排泄に関して取り立てて考える機会は少ないが、一度病床に伏し、排泄の処理を他人に依存せざるを得なくなった時、これほど自尊心が傷つけられる事はない。

看護婦は単に尿意、便意に応じるのではなく、排泄環境、方法、人間関係から生じる心理反応まで目を向けていく必要がある。しかし排泄に関する文献はあるが、直接患者が感じている心理についての文献は見当たらない。

そこで私達は、長期にわたり床上排泄を行っている患者の心理を明らかにし、今後の排泄介助に活かしたいと考え、インタビューを行い、その心理を分析したのでここに報告する。

### II. 研究方法

1. 期間：平成8年8月～10月末
2. 対象：長期（2ヶ月以上）臥床患者女性2名（表1）

患者Aは術後より床上排泄。排泄時は全面介助。他院での入院生活が長い。

患者Bは骨折後より床上排泄。排泄時便器の取りはずしが自分でできる。以前に入院の経験はあるが、その頃の事は忘

表1 患者紹介

	患者A	患者B
年齢・性別	63歳・女性	74歳・女性
病名	Th 4/5後縦靭帯骨化症	左大腿骨遠位部腫瘍
家族構成	夫とは死別。3人の子供が県外にいるがほとんど交流なし	夫とは死別。一人暮らしである
既往歴	22歳 卵管結紮 H2.1 後縦靭帯骨化症頸部前方固定術 H6.6 右人工膝関節置換術	20歳代 リウマチにて入院 20～30歳代 腎疾患にて入院
現病歴	H8.6.17入院 7.17後方固定術施行	H8.4.24.入院 5.10 観血的腫瘍生検術施行 7.1 左膝関節骨折しシャレ固定
性格	明るく話好き、感情の起伏が激しい 思い込みが強い傾向がある	寂しがりで話好き、涙もろい 出来ることは自分でしたい
排泄状態	ベット上で全面介助	ベット上で便器の取り外し可能

れている。

3. 方法：床上排泄について看護婦と患者1対1で自由に話してもらい、患者承諾のもと録音を行った。その後テープの内容をKJ法にて分類した。

質問内容・ベッドの上で排泄する事についてどう思いますか。

- ・ベッドの上で排泄するときに気になる事、不安な事、嫌だなあと思うことはないですか。
- ・介助してもらう人に対して何か希望があれば聞かせて下さい。

### Ⅲ. 結果 (表2)

羞恥心・あきらめ・看護婦に対する不満・感謝・他人に対する気兼ね・他院との比較の項目に分類できた。その中で共通した項目は、羞恥心、あきらめ、看護婦に対する不満、感謝がある。

羞恥心のなかには、排泄は嫌な事で恥ずかしい事と感じているが、内容としては少なかった。

あきらめのなかには、床上排泄は仕方がないと感じている。

不満のなかで、患者Aは他院と比較して接し方、技術面を多く上げており、看護婦の年齢層が他院に比べ若いために教育をしてほしいと言っている。患者Bは心づかいの不

表2 インタビュー結果

	患者A	患者B
羞恥心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・女性とし一番嫌な事</li> <li>・羞恥心があり抵抗がある</li> <li>・床上でとられる事が苦痛</li> <li>・カチンを引いてくれず嫌だった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最初は恥ずかしかかった</li> <li>・足を広げると言われるのが嫌だった</li> </ul>
あきらめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頻尿なのは仕方ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今は仕方ないと思う</li> <li>・カチンの開・閉は気にならない</li> </ul>
看護婦に対する不満	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カチンをきちんと引いてほしい</li> <li>・きちんと拭いてほしい</li> <li>・拭き方が乱暴</li> <li>・心がこもっていない</li> <li>・若い看護婦の教育が出来てない</li> <li>・若い人は気付かない人が多い</li> <li>・患者も気を使っている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・排泄後はすぐに始末してほしい</li> <li>・忙しそうで声を掛にくい</li> <li>・当番以外の人に声を掛にくい</li> <li>・気を使って看護婦に言い難い</li> <li>・言い易い人と言い難い人がいる</li> </ul>
看護婦に対する感謝	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護婦も大変だろうと思う</li> <li>・シーツが汚れても嫌な顔をしない</li> <li>・嫌な事をしてくれる優しさ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・優しい言葉がうれしい</li> <li>・親切でありがたい</li> <li>・着物を着替えてくれる事がある</li> </ul>
他人に対する気兼ね		<ul style="list-style-type: none"> <li>・他人は嫌じゃないかと思う</li> <li>・臭いが気になる</li> <li>・シーツを汚すことが一番気になる</li> </ul>
他院との比較	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頻尿の事を全看護婦が知っていて隣の患者訪室時も自分を気遣ってくれる</li> <li>・他院では尿をきちんと捨ててくれて、気遣いがある</li> <li>・他院の方が心使いが出来ている</li> <li>・他院が便器の当て方、拭き方がしっかり出来ている</li> <li>・下のことが心配で前の病院に行きたい</li> </ul>	

足を言っている。また、嫌な顔をしない、優しいという感謝の言葉が聞かれた。

患者AとBの相違点として、患者Aは、他院との比較が多くあったのに対し患者Bは、他人に迷惑をかけてはいけないと強く感じている。

#### IV. 考察

排泄に関わる看護は、生活能力の基礎として自立して行う行為を援助し、他人に見られたくない行為に手を貸すことである。人間は排泄の世話を受けるようになった時、抵抗感、羞恥心、情けなさを抱くものである。

排泄行為に対し羞恥心を感じる対象は、1) 行為をしている姿を見られる事、2) 露出する性器、肛門を見られる事、3) 排泄物を見られる事の3点が考えられると、吉田<sup>1)</sup>は言っている。今回のインタビュー結果からは、羞恥心そのものよりも看護婦の手技や、対応に不満が多く聞かれた。そのため、看護婦が実際に行う手技や、接しているときの対応そのものが、心理面に大きく関与していると思われる。羞恥心があまり出てこなかった要因としては、マズローのニード論で述べられているように、生理的ニードが充分満たされていないためではないかと考える。長期に床上排泄を経験しており、また病院での排泄行為は、看護あるいは治療上の処置中に含まれ、ベッド上安静が必要であるから仕方がないというあきらめ感が強いようであった。

また看護婦に対する不満は、大きな位置を占めており、中でも患者Aは他院との比較による内容が多く、看護婦に対する技術的な面での不満を言っている。それは、尿器をあてがう動作から排泄後の始末まで全面的に援助を受けなければならない事が大きく関与していると思われる。逆に患者Bはそのような排泄行為を自分で行っているため、寝具を汚したりしないかという自分自身の技術に不安を持っていると考える。

これらより、患者の心理に影響を及ぼす要因として、看護婦の技術が大きく関与していることがわかり、安全・安楽な熟練した技術は、患者の苦痛の軽減につながるのももちろんであるが、個々に応じた介助方法を考慮する必要がある。また、人間関係にも大きく左右されており、看護婦によって介助を頼みやすい、頼みにくい状況があり、そのために看護婦の言動をアセスメントをしていく必要がある。

気兼ねは、患者Bについては大きな位置を占めている。できれば他人の手を煩わしたくないと抵抗を感じ、病気だからしかたがない故の致し方ないことと、自分に言い聞かせながら介助を受けている。そのため、排泄が気持ちよくできるよう援助を行うことが必要である。また、同室者への気兼ねも大きく、配慮しなければならない。

排泄は、生活の中にパターンとして組み込まれている。しかし入院、病気と生活パタ

ーンの変化に伴い大きく左右される。また、介助方法によっては、排泄のパターンを崩しかねない。と丸川<sup>2)</sup>は言っている。そこで排泄への看護は、尿意・便意に対し単に介助するのみでなく個々に応じた心の反応に答えていかなければならず、看護婦は、患者の身の回りの世話を通し極めてプライベートな領域に介入しなければならない。その中で秘密を厳守し、個々にあった援助を行う必要がある。

## V. まとめ

1. 羞恥心そのものよりも、床上排泄は仕方がないというあきらめの方が強かった。
2. 看護婦の熟練した技術は、患者の苦痛の軽減につながる。
3. 看護婦の言動が、患者の心理面に影響を及ぼしている。

## VI. おわりに

今回、床上排泄患者2名にインタビューを行った。2名という数は症例としては少なく、年齢も片寄っていたため十分な心理分析とはならないが、心理を知る事により、排泄に対しての看護の基本を見直す事となった。今後は、患者の心理面に気配りができ、個別的なニードをふまえ、気持ちよい排泄ができるような看護技術を身につけたい。

## 引用・参考文献

- 1) 吉田集而：排泄と看護，看護MOOK，No. 28，P42，1988.
- 2) 丸川和子：排泄と看護，看護MOOK，No. 28，P 3，1988.
- 3) 延近久子：ナーシングスキルの現在・排泄の援助，看護技術10月増刊号，1992.
- 4) 田中富士美：床上排泄訓練，臨床看護10月号，1996.
- 5) 田中富士美：ADLについて，臨床看護10月号，1996.
- 6) ライト州立看護理論検討グループ：看護理論集，日本看護協会，1983.
- 7) 中島紀恵子：生活の場から看護を考える，医学書院，1994.
- 8) 小島操子：看護の研究・実践のための基本概念，1984.